

内的偶然と努力感について

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

中根 弘之

0. 序

『意識に直接与えられたものの試論』（以下『試論』）におけるベルクソンの自由をめぐる検討は、これまでの自由論の構図を否定し、自由についての新しい捉え方を要求している。ベルクソンによれば、物理的な決定論にせよ、心理的な決定論にせよ、意識の持続を捉えることの出来ない言語的象徴を用いることで、とりわけ時間を空間に置き換えることによって、自由を論じる議論の土台から誤りをおかしている。その誤った土台の上では、自由を否定するにせよ、肯定するにせよ、自由の本質をつかみ損ねているとベルクソンは、考えているのである。

この基本的なベルクソンの自由についての立論を検討する中で、非常に興味深い点がある。それは『試論』第三章の中に登場する「先形成 *préformation*」(DI 134) と「努力の感情 *sentiment de l'effort*」¹ (DI 138) についての立論である。

持続においては、先行する意識の諸状態が後続する意識の状態に浸透して刻々と新しい意識の事実が生み出される。決定論は、そもそもその意識の本質を見落としているわけであるが、一方で、先行する意識の諸状態が後続する意識の状態に浸透するという事態は、過去、現在、未来の契機にとって先行するものが決定的な役割を果たすともみなすことが出来る。実際、ベルクソンは、「ある意味において、未来は現在の内で先形成されていた *l'avenir était préformé dans le présent* ということが出来る」(*ibid.*) と述べ、それを認めている。しかし、持続理論において、過去の動機がどれほど強固なものであったとしても、その動機が行動として現在化する際、過去の動機は全く同一のままに現在の行動として現われることはできない。時間的継起を経ることで、動機は必ず質的に異なるものになってしまうからである。それゆえに、先行する意識の状態と後続する意識の状態の間には、必然的な関係を見出すことはできないはずなのである。

問題はこの質的に異なる要素が、全くの非必然的なもの、つまり全く偶然的なものではない、ということである。仮にそうであるならば、ベルクソンは、「内的な状態の外的顕現」

(DI 109) を自由な行為とはみなさないであろう。単に、その瞬間その瞬間、その都度今までの意識状態から質的に切り離された何ものかが非決定に現れるような、行き当たりばったりの気まぐれによる行為と自由な行為には差があるはずなのである。したがって時間の継起の中に、「先形成」されたものとそれによって生じる行動には何らかの関係性が見いだされるはずである。ベルクソンの自由な行為は「熟れ過ぎた果実が落ちるように」(DI 116)、発せられるものなのであるから、熟れる過程と果実が落ちる過程には連続は見いだせるはずなのである。

この決定論が言う意味で、先行する過去が現在を、あるいは現在が未来を決定するのではない、自由や非決定の領域を指示するものが「先形成」であり、「努力の感情」である。本論文は、この「先形成」と「努力の感情」の検討を通して、先に発表した偶然性の問題²を内的な意識の事実に沿って解明することを目的とするものである。

キーワード

自由 先形成 努力 偶然

1. 因果律と二つの先形成

「先形成」と「努力の感情」が主題化されるのは、『試論』第三章、「意識的諸状態の有機的組織化について－自由」と題された章の中の末尾に近い箇所である。『試論』第三章の議論としては、物理的決定論、心理的決定論の二つの決定論が吟味され、さらにその決定論がよって立つ論拠、過去から現在の間の偶然性、過去から現在、現在から未来への予見性、そして因果律そのものについての検討が行われる³。そして結論として、「時間は空間に十全に表象されるか？」(DI 145) という問いに戻り、これまでの自由についての立論が、自由の周辺を回るのみで十分に自由の問題を論じるものではないことが示され、意識の事実としての自由が肯定されるという構図になっている。「先形成」と「努力の感情」は、この中の因果律をめぐる問題の中で検討されている。

実のところベルクソンは、意識の事実因果律を妥当させ、決定論を主張する人々に対して、早い段階で反論は可能だとみなしている。なぜなら因果律が、「同じ内的原因は同じ結果を生じさせる」(DI 131) というものである以上、意識の事実についてそれが妥当しないことは、『試論』一章、二章に加え、三章で進めてきた検討から明らかだからである (DI 131)。しかし、ベルクソンは、それで満足せずに「この決定論的立論の最後の形式にとどまることは無益ではない」(DI 132) と検討を続けている。

なぜ、ベルクソンは、因果律についての検討をさらにとどまって加えているのだろうか。それは「行為はその先行諸条件に分かちがたく結びついている」(*ibid.*) という点にベルクソンが注目したからである。「原因の概念を分析すること」(*ibid.*) は、ベルクソンの持続が示

す先行する意識の状態と後続する意識の状態の浸透現象による自由を、より明確にするに違いないのである。

ベルクソンの検討は、「原因という語を新しい意味の取り方 *acception* で扱う」(DI 133) という点に向けられる。

実際、二つの現象の規則的な契機を確認することは、第一のものが与えられているなら、すでに他のものが覚知される *on aperçoit déjà l'autre* ことを認めることである。しかし、この二つの表象の全く主観的な連結は、常識 *sens commun* を満足させない。常識にとって、第二の現象の観念 *idée* がすでに第一の現象に含まれているのならば、第二の現象 *phénomène* それ自体が一つのあるいは他の形式で一現象の中に客観的に実在している必要があるようである。(*ibid.*)

因果律を形成する原因と結果の連結について、ベルクソンは二つの異なる態度があることを主張している。一つが原因と結果の主観的な連結であり、もう一つが客観的な連結である。原因と結果が、「覚知 *apercevoir*」で結びつくことについてはベルクソンも認め、これが主観的な原因と結果の連結の基礎となる。しかし他方、現象としての原因の内に現象としての結果の「客観的な実存」を認めるに至って、客観的な連結を認める立場がある。ベルクソンとしては、原因と結果が主題化される際には、主観的な連結の意味で原因と結果の連結が語られていたはずなのに、いつの間にか、客観的な連結の意味で原因と結果の連結が語られるので、事態が混乱すると言いたいわけである⁴。

ここで主観的な連結において注意しなければならないのは、二つの本性的に差異を持つ契機が連結させられているという点である。主観的連結の場合、観念と現象という本性上異なる契機が連結させられるのであり、現象同士の連結という性質を同じくする契機の連結ではない。しかし、ベルクソンに言わせると、原因と結果について論じるうちに、「人は知らず知らずに第一の意味【主観的連結】から第二の意味【客観的連結】へ移り行く」(DI 134【補足は引用者による】)。本性上異なるものを連結させていたはずが、その本性上の差異を無視する連結に変化し、後続する第二の現象が第一の現象の中に「先形成」されているものとして表象するようになるというのである。

2. 数学的先形成と物理的先形成

そこでベルクソンは、主観的連結の「先形成」と客観的な連結の「先形成」を区別し、まず客観的連結、我々の常識や決定論者が依拠する「先形成」について検討する。

この「先形成」は、数学によって十分に説明される。「平面上で円周を描くという同じ運動がこの図形の全ての特徴を生み出している」(*ibid.*)、と言われるように「無限の数の諸定

理が、定義の中に先に存在している *préexistent*」 (*ibid.*)。

このように、幾何学的な運動が代数の諸定理を必然的にあらかじめ包含していることに疑念はない。この場合、包含関係を形成する原因と結果、つまり代数上の先行する項と後続する項の関係は、いわばカントが主題化した先験的総合判断に該当するように⁵、客観的に同質のものが包含関係を形成することになる。しかし、これが物理学に至ると問題は変わってくる。なぜなら物理学は、我々の知覚によってとらえられた対象を軸に展開する学問だからである。

ベルクソンに言わせれば、純粹に物理的な運動を意識の与件に基づいて受け入れる限りで、我々はその間に数学的な必然的連関での「先形成」を見出すことが出来ないはずである。そこには必ず抽象の努力を必要とするはずであり、ベルクソンがW.トムソンの例を示しているように (DI 135)、物理的な運動の基体となる原子のような項でさえも、規則的な運動に解消して取り上げる他はない。しかし、この点を等閑に付し、この方向を推し進めたとしよう。最終的に、物理現象の因果律は「同一の関係」 (DI 136) に近づき、重なってしまう。

同一律は我々の意識の絶対的な法則である。つまり、考えられたものが、考えられた瞬間に考えられているということこそそれは主張している。そしてこの原理の絶対的必然性をなしているものは、未来を現在にではなく、現在を現在に結び付けるということである。この原理は自らの役割に忠実に魂の現実的で明白な状態を確認するにとどまる限りで、意識が自分自身の内で感じる揺るぎのない確信を表している。 (*ibid.*)

数学の定義と諸定理の関係が等号で結ばれるのは、まさにそれが同一であるからである。問題は、その数学的な同一律を物理現象にまで妥当させ、必然的原理の形をとらせることが出来るだろうか、という点にある。因果律が現在と未来を結びつけるものであるのなら、それは不可能である。

なぜなら、実在的時間 *temps réel* の継起的諸瞬間は互いに連帯していないし、いかなる論理的な努力によっても、かつて存在したものがこれからも存在するし、存在し続けるということ、同一の先行諸条件はいつも同一の諸結果を招くだろうということを証明するには至らないからである。 (*ibid.*)

対象が「我々のように持続しない諸事物 *les choses*」 (DI 137) であったとしても事情は変わらない。「何か理解不可能な理由」によって、「諸現象は継起して現れる」のであり、「一度に展開しない」ことは我々の意識が主張することだからである (*ibid.*)。数学的な同一律と物理現象にみる因果律は別種のものであり、因果律が同一律にどれほど近づくとしても、

「因果性と同一性が合致して我々に現れることはない」(*ibid.*)。我々の常識や決定論の依拠する「第二の意味」の「先形成」は、「継起の諸連関を内属 *inhérence* の諸連関に変え、持続の働きを取り消し、見かけの因果性を同一性で置き換える」、「固定観念 *préoccupation*」によって生まれたものであり⁶、意識的な事実に基づくものではないのである。

3. 意識の事実の先形成

ベルクソンは、数学的、物理的な「先形成」の検討を終えてから、「別の種の先形成がある」と述べて、「直接的意識がそれについて我々にイメージを供給するために、我々にとってより一層身近な先形成」について論述する (DI 138)。

実際、我々は、継起する意識の諸状態を移り行き、後続する状態が先行する状態に少しも含まれていなかったのに、その際に、我々は多かれ少なかれ漠然と後続した状態の観念を表象している。他方、この観念の実現化は、確実なものではなく、単に可能なもの *possible* としてであるように思われる。けれども、観念と行動 *l'idée et l'action* の間には、ほとんど感じることのできない諸中間状態 *intermédiaires* が置かれていたのであり、その中間状態の総体は、我々にとって、努力の感情と呼ばれる特殊な形態 *cette forme sui generis* qu'on appelle *sentiment de l'effort* をとっている。そして、この観念から努力、努力から行為 *l'acte* の進展は、どこで観念と努力が終わり、どこで行為が始まるのか述べることが出来ないほどに連続的である。(*Ibid.*)

本論が注目する「先形成」と「努力の感情」の論述は、先行する観念と後続する行動の中間状態にあって、確実ではない仕方で前者と後者を連結している。それは確かに未来の行動が現在の内に先形成されていたということはできるが、「とても不完全であることを付け加えなければならない」(*ibid.*)。「なぜなら、現在その観念が所有されている未来の行動は、現実化されたものではなく現実化可能なものであり *comme réalisable mais non pas comme réalisé*、その行為を行うために必要な努力を描き出している時でさえ、立ち止まる時間がいまだあることが感じられている」(*Ibid.*) からである。

問題は、この「先形成」と努力感の内実についてである。この点についてベルクソン自身が提示している興味深い具体例がある。

例えば、窓を開けるために私が立ち上がる。そして立つや否やなすべきことを忘れてしまう。すると私は動きを止めたままになる。【中略】しかしながら、私は決して座りなおさない。私は漠然とした仕方でなすべき何事かが私に残されているのを感じている。したがって、私の不動性は、取るに足らないありふれた不動性ではない。すなわち、私が保った

ままの姿勢には、果たすべき行為が先形成されているのである。こうして、一瞬掻き消えた観念を見出すために、私はこの姿勢を維持して、この姿勢を研究する、いやむしろ心の奥底でこの姿勢を感得しなければならない。(DI 106 傍点強調は引用者による)

この事例において特徴的なことは、果たすべき行為の「先形成」が、私には感じられているということである。それは「特殊な色合い *une coloration spéciale*」(*ibid.*)を持っており、もし仮に別の目的のために、例えば電話が鳴ったので電話をとるために立ち上がったが、途中で電話が切れて立ち尽くす、といった場合の不動性と、窓を開けて得るために立ち上がって、それを忘れて立ち尽くす不動性は同一ではない、ということなのである。確かに「言語は、この運動とこの姿勢をなお同じ仕方で表現する」(*ibid.*)し、そこから連合主義心理学の誤った解釈も生まれることになる。ベルクソンとしては、持続の形態をとる意識の継起において、非人称的で共有可能な事実などというものが存在せず、継起をなす諸契機そのものが全て独自の色合いを以て連結しているとしているのである⁷。「先形成」されているということは、その継起の中で成立した「特殊な色合い」を帯びているということに他ならない。

そして、意識の質、この「特殊な色合い」こそベルクソンが主題化する自由の本質をなす。時間を空間的な表象に置き換え、J. S.ミルのように別の仕方で行為することもありえた、と述べること (DI 114-118) は意味がない。「時間はその上を辿り直される線分ではない」(DI 119) からである。いくら精緻に象徴を用いても、時間についての単純な事実、二度とその継起を経験することが出来ないという事実によって否定されてしまうのである。

別の言葉でいうなれば、自由の問題はこの議論から手つかずのまますり抜けた。このことは苦も無く理解される。なぜなら自由は行為そのものの何らかのニュアンスや質 *une certaine nuance et qualité* に求められるべきで、行為とこの行為がそうではないところのもの、またはそうでありえたかもしれないものとの連関の内に求められるべきではないからである。(DI 120)

では、このニュアンスや質はどのようなものなのだろうか。

4. 努力感

ここでまず、自由な行為がなされている時に意識に直接与えられる契機である努力感、「努力の感情」について考えてみよう。先に引用した箇所であげられているように、「努力の感情」は、観念と行動の間にある中間状態の総体であり、観念と行動と不可分に結びついていものである。この努力感について考える上で、非常に参考になるベルクソンのテキストとして『試論』以降に書かれた『物質と記憶』やその連続線上にある「知的な努力」がある⁸。

しかし、イマージュ論、記憶力理論を論の道具立てとしてもつこれら後年のテキストに頼らず、今、ひとまずは、『試論』にとどまって検討してみよう。

『試論』において、第三章以前に努力が論じられる箇所が見出せるのは、『試論』第一章の心理的諸状態の強度について検討された箇所である。その中に「筋肉の努力 l'effort musculaire」と題された一連の論述がある (DI 17-21)。

「筋肉の努力」は、非延長な意識の状態と空間で展開される延長的な筋肉の力を結び付ける最も典型的な事例として登場する。この検討の中でベルクソンは、A.ペインやW.ヴントなどに対立させる仕方でW.ジェームズの学説を紹介している。その対立点は、ペインやヴントの理論が、筋肉の努力の感覚を「神経的な力の遠心的な流れ」(DI 18)に求めているのに対して、ジェームズは明確に「努力の感情は、求心的なものであって遠心的なものではない」(DI 19)と表明した点にある。ベルクソンにとって、この両者の論点は非常に重要な意味を持つ。仮に筋肉の努力が、ペインやヴントが述べるように遠心的であり、意識の状態が直接空間に展開するものとしてとらえられるのであるならば、意識状態が空間的量を持つことになり、意識の諸状態は空間上に併置されない、というベルクソンの持続理論のテーゼを揺り動かすものになってしまう。しかし、ジェームズはそうは言っていない。ジェームズが述べるところに仮託するベルクソンは、身体の様々な筋肉の収縮に由来する諸感覚の質差に注目するのである。

以上の事実、そしてそれに類する他の事実から、以下の結論を導くことが出来ると我々は信じる。筋肉の努力の増大についての我々の意識は、末梢神経の数の増大と、それら諸感覚の間で生じる質的な変化についての二重の知覚に還元される。(DI 20-21 傍点強調は引用者による)

こうして、「筋肉の努力」は、非延長的なものとして空間的な併置を許さないもの⁹であることが確認されるのである。

この筋肉の努力に関する論述は、一見して今、話題にしている努力感と関係がないように思われる。しかし、以下の主張がまさにその疑問を否定する。

実際、多くの数の心理的状态は、筋肉の諸収縮と末梢的な諸感覚を伴っている。これらの表層的な諸要素は、一方で純粹に思弁的な觀念によって互いに秩序づけられ、他方で実践的な規準の諸表象によって秩序づけられる。(DI 21)

今、主題化している觀念から行動の中間状態を示す努力感も、まさに筋肉を介した身体運動と連続的である以上、この「筋肉の努力」と無関係ではない。ベルクソンは、「筋肉の努

力」の後に「純粹に思弁的な観念」によって秩序付けられる「知的な努力」として「注意と緊張」(DI 21-22)を、「実践的な規準の諸表象」によって秩序づけられるものとして「激しい情動」(DI 22-24)を取り上げているが、この両者ともに具体的な行動の原因としては十分なものなのである。

そして、ここで我々注意したいのは、この努力において「求心的なもの」が存在する事実である。ジェームズに導かれるようにベルクソンが取り上げたこのポイントは、観念から行動が一方通行で発展するのではないことを明確に示している。つまり、観念が行為に、内部から外部に一方向的に進むのであれば、表象が表象と連結する数学的な「先形成」とそれほど異なるものではないだろう。先行するものと後続するものが必ず決まった仕方では連結するという意味では変わらないからである。先に取り上げたように、確かに時間の継起は、「辿り直される線分ではない」。一度なされた行動についてなら許容されても、今から行う行動について、観念と行動が可逆的に結ばれることはあり得ないという意味では一方向的な継起を想定しなければならないかもしれない。しかし、一方向に進むからといって時間は、一挙に展開するものではない。熟慮が、時間の流れに抗して、諸観念の間を行きつ戻りつするように思われるのは、観念が自動的に現象に変化するのではなく、観念の現象化にいわば抵抗する異質な何かがあるからである。努力が明らかにするのは、観念が現実化する際に得る求心的意識の所与の存在であって、それは観念が抱かれた時から存在し、実際の行動が行われる際にも消えてしまわないことから、「どこで観念と努力が終わり、どこで行為が始まるのか述べることが出来ない」のである。

5. 先形成の不確実性

努力感に加えてもう一つ、検討すべきものが「先形成」の不確実性である。なぜ「先形成」は可能性にとどまるのであろうか。先に検討したように、外的な抵抗が存在するから、というのは確かにあり得る回答の一つである。観念が現実の現象に変化するために乗り越えなければならない抵抗が常に備わることは不可避的であり、その抵抗が不確実性の根拠であるのは妥当性を持ちえるように思われる¹⁰。しかしそれだけだろうか。

自由な行為を検討するに当たってベルクソンの論述を確認すると、外的な抵抗の他にも他の可能性があることが分かる。

表面に立ち登るのは、この底部の自我である。抵抗し難い圧力に屈して避けるのはこの自我の外皮が避ける。それゆえ、自我の奥底においてとても論理的に配置された理屈の下に、おそらく全く無意識的なものではないにしても、我々が注意を向けようとしなかった諸感情や諸観念の沸騰が生じ、それによってこれらの諸感情や諸観念の緊張は次第に高まっていく。(DI 112)

よく知られているように、ベルクソンは自由な行為を「内的な状態の外部への顕現」(DI 109)であるとみなしている。問題はこの自由な行為として顕現する内的な状態が、相互に浸透し合った「魂全体 *âme entière*」(DI 110)の形態をとっているということである。我々の日常的な意識は、「言語の持つ利便性と社会的諸関係の安易さのため」(DI 111)、この全体をなす意識の状態の顕現を「押し戻す」(DI 112)。その顕現は、あまりに個体的なものであるがゆえに我々の日常生活を脅かすものだからである。そのため、我々は日常生活において、場当たりの理由をとってつけたように自らの行動に付与して説明するが、それは行動の理由としては十分ではない。

そして、これこそが我々の突然の決心の変化をそれに先行する見かけ上の諸状況で説明しようとしても無駄であることの理由なのである。我々は、自分がどのような理由で決断したのかを知ろうと欲するが、我々は自分が理由なしに決断したこと、おそらく理由に抗してさえ決断したことを発見する。しかし、それこそまさに、この諸理由の中で最良の理由なのである。(ibid.)

もともと自由な行為は、自我全体がその行為の理由となるようなものであるので、「我々にとってほとんど外在的で、判明で、容易に説明されるような表面的諸観念」(ibid.)と自由な行為の真の理由、原因は合致しない。自由な行為の原因は混然一体となった諸観念の集塊だからである¹¹。

このことを注意すれば、我々の行動にまつわる偶然性は、単純に外界からの抵抗によってだけ定まるとは言えないことが分かる。たとえば、なにか一つの観念、窓を開ける観念を抱いて椅子を立った時、私の意識の全てが窓を開けることだけに占められていたならば、それは自然になされたかもしれない。しかし、現実にはそうではなく、私の意識はとりあえず窓を開けるという観念に焦点が当たっていたとしても、その他の諸観念もまた窓を開ける観念に溶け込んでいるのである。この溶け込んでいる観念が、ある姿勢をとった時、窓を開ける観念にとって代わることがあったとする。するとこの窓を開ける観念は行動に現実化することを妨げられ、私は立ち尽くすことになるのである。

以上の検討から、自由な行為における「先形成」が「可能性にとどまる」のは、外的な要因よりも内的な要因によるものとみなす方が自然になるだろう。観念として私のなすべき行為が「先形成」され、私になすべき行為を促すとしても、それは実際に空間上で行われる行動のように、判明な輪郭を持ったものではない。その「先形成」には他の観念も浸透し、常に他の行動が現実化することを妨げないのである。そもそも「先形成」という概念そのものにもここでは注意が必要であろう。「先形成」は、実現された行動からいわば時間の流れを逆にして生み出された概念であって、時間の流れに沿って生み出された概念ではない。ある

行為がなされた時に、その行為が先に描かれていたというのは、輪郭を持った行動から、輪郭を観念の内に持ち込むことにはかならないのである。したがって、この観点から見た場合、輪郭を持つあらゆる行動は観念として先にあったとは言えても、輪郭を持った判明な観念が先に存在していたということにはならないのである。

6. まとめ-内的偶然

以上、「先形成」と努力感について検討してきたが、最終的にその二つが生み出す偶然性についてまとめよう。

ベルクソンにとって過去の意識の状態が現在や未来の意識状態に浸透する持続は、意識の諸状態の継起を現実を示すものである。したがって、過去と現在、現在と未来の間には十分な連結が存在している。しかし、それが具体的な行為の原因として挙げられるとき、過去が現在の、現在が未来の行動の原因に直接なるかといえばそうではない。そもそも時間の不可分な継起に、過去、現在、未来を切り分けることからして不可能だからである。しかし、仮にそれが可能であったとしよう。その場合、あくまで意識の中で把握される「先形成」は観念としてそこにあるのであり、その観念は、様々な観念と浸透し合って存在している。そのため、特殊化された一つの行動の観念が思い描かれ、実際に運動が開始されたとしても、そこには一つの行動の現実化を妨げる観念が常に付随している。意識をたった一つの観念が支配し、その観念のままに行動するとすれば、それはベルクソンが出している事例でいうところの「催眠状態において受け取った暗示」(DI 110)で動くことを意味し、「自動機械」(DI 111)のように、行動する人を指すことになる。しかし、意識を持った我々は、そのような状態に完全に落ち込むことはない。努力感が示すように、何事かを為そうとする際に、余程習慣的になってしまった身体の運動でもない限りは、それを思いとどまらせるきっかけとして、求心的な身体感覚がそこに発生するのである。

この求心的な努力感は、外界との接点を確認される重要な契機である。私の観念が熟して現実の行動となるためには、外界の判明な輪郭を持つ契機が必要となるのであり、観念が観念と連結するのみでは現実の行動にはならないのである。もちろん、ベルクソンの立論によれば、観念が抱かれた時、すでに我々の意識に外界との接点を持つ求心的な努力は少なからず含まれている。観念が熟するといった場合でも、必ずしも観念の内に他の契機が混入することを禁止してはいないのである。観念、努力、行動が連続的であるというのは、まさに意識の事実の展開に即しているのである。

この「先形成」と努力感に基づく『試論』の論述は、物活論のように宇宙全体にそれを認めるような「物質的な宇宙に、漠然とした、空間を経て拡散した人格を割り当て、この人格は、意識的な意志を全く授けられていないとはいえ、内的推力 *poussée interne* によって、努力によってある状態から別の状態へと移行する」(DI 139)可能性を提示する。もちろん、

『試論』においては「諸事物 des choses が我々のように持続しないとしても、何か不可解な理由が諸事物の中に存在しているはずで、そのため諸現象は一挙に展開するのではなく、継起するものとして現れること」(DI 137) を我々が意識していることを示すのみで、詳細に検討されているわけではない。しかし、因果律そのものを検討することで「自然現象の中にまで偶然性を認めるに至る」(DI 141) こと自体は示されている。ベルクソンに従えば、同一律に回収されない限り、そこに自由、非決定は見出すことができるはずである。仮に宇宙が我々の意識がとらえたとおりの世界であるならば、それは時間的継起と共にあり、偶然を許容するものなのである。もちろんこの場合、ベルクソンの主張する自由や偶然は従来のものと明らかに異なる概念的道具立てを要求する¹²。外的な観察者の視点、空間的表象を介して宇宙を捉えた場合、必然的であるか偶然、自由であるかは二者択一的にしか判断されない。しかし、ベルクソンの注目する意識の事実が示す偶然や自由は、「自由は度合いを許す」(DI 109)。ベルクソンにとって、この宇宙に時間的継起が認められ限り、全てが自由で偶然的である。問題となるのは、この度合いを決定する契機であり、『試論』とそれ以降のベルクソンの立論に従えば、それも結局他の实在の自由や偶然との関係でしか提示できないことになる。ベルクソンの自由についての論述は最終的に、個としての实在の輪郭を打ち消し、宇宙に備わる諸傾向の関係という議論に立ち戻る。その点でベルクソンが『試論』のテキストで何度も言及するライプニッツのモナドのような、それでいて理性的な予定調和を想定しない宇宙を論じることがベルクソンの自由論の最終的な局面になるのではないだろうか。

略記号

使用したベルクソンのテキストは、Bergson,H.,1991,*HENRI BERGSON ŒUVRES* 5^e édition , Presses Universitaires de Franceである。収められている著作、論文に関しては、以下の略語を明記し、引用箇所や参照箇所のページ数を明記する。また、特に指定がない場合の強調は著者による。

Essai sur les données immédiates de la conscience…DI

Matière et mémoire…MM

L'Énergie spirituelle…ES

参考文献

Bergson,H.,1990,*Cours I* , Presses Universitaires de France

Bergson,H.,1990,*Cours II* , Presses Universitaires de France

杉山直樹、2006、『ベルクソン 聴診する経験論』、創文社

平井靖史、2011、「自由にとって時間とは何か—ベルクソンにおける可能性なき自由について

て一]、『西日本哲学会年報』第19号、pp.161-186

Hirai,Y.,2012,Imprévisibilité comme liberté chez Bergson,*Disséminations de L'Évolution créatrice de Bergson*,ed.Abiko,S.,Fujita,H.,Sugiyama,N.,Olms,pp.85-94

九鬼周造、『偶然性の問題』、岩波文庫、2012

九鬼周造、『時間論』、岩波文庫、2016

『現代思想2017年1月臨時増刊号 九鬼周造』青土社、2016

¹ 本論文では「努力感」という語を用いているが、これはベルクソンのテキスト上、一般に「感情」と訳されるsentiment、「感覚」と訳されるsensation がその文脈によって使用されているため、その両者を指す語として「努力感」という語を用いた。

² 中根弘之、2020、「ベルクソンにおける「偶然」の概念について」、『東洋大学大学院紀要』第56集、文学研究科、pp.67-80

³ ベルクソンは『試論』を挟んで、『試論』を発表する直前の1888年から1889年に行われたと推定されるクレルモン＝フェラン校で行った心理学講義、『試論』を発表した後の1892年にアンリ4世校で行った心理学講義を行っている。この資料は、ベルクソン自身による講義資料ではなく、学生の講義ノートを元にしていう点、またベルクソン自身が講義で積極的に自説を展開してはいないという点で、ベルクソンの思想を直接伝えるものではない。しかし、心理的狀態を表記する際の参考として参照すると、「観念idée」について、ベルクソンが、『試論』と同様に、意識に思い描かれた想念という意味以上のものを与えていない点が明確になる。

また『試論』と対照すると、心理学講義で「意志」や「自由」を論じる際に、その論じ方が微妙に異なっているのが分かる。たとえば「意志」について論じる際、クレルモン＝フェラン校の講義では、「熟慮」について複数の観念の間を揺れ動くこと（Cours I pp.253-254）、という本論文でも触れたミルの意見に近い立場で検討されているのに対して、アンリ4世校の講義では『試論』のように、「熟慮」は、観念の成熟から「おのずと実行される」ものに変化している（Cours II p.253）。「自由」についても、アンリ4世校でも踏襲される「物理的決定論」と「心理的決定論」の他に、クレルモン＝フェラン校においては「神学的決定論ないし運命」が検討されている（Cours I pp.254-257）。

今回、主題化した「先形成」や努力感について確認すると、クレルモン＝フェラン校では該当する論述が直接見いだせなかったのに対して、アンリ4世校の講義は『試論』で論述された「自由」の論述に近しく変化している。

⁴ ただし、この連結が意図的に行われたというよりも我々の自然的な態度で行われることをベルクソンは注意している。ベルクソンは、D.ヒュームにならって主観的な連合を習慣によって客観化することを「自然な事態」（DI 139）としているのである。

⁵ ベルクソンのカントに対する直接的な批判は『試論』の内にいくつも散見されるが、とりわけ重

要なものは結論部（DI 174-177）の論述で、これはアンリ4世校の「自由」についての講義においても踏襲されている（Cours II pp.256-264）。詳細なベルクソンによるカント批判の意義については、杉山、2006、pp.39-70を参照。

⁶ この「固定観念」、連合主義心理学が犯している「事象についての説明と事象そのものを混同する」誤り、力動論を機械論に解消しようとする努力は、『試論』において「言語の持つ利便性と社会的諸関係の安易さのため」とされ、それ以上の分析は為されていない。後年の知性に対するベルクソンの立論の展開を加えるなら、自身の生に対して自己の意識が外的なものであり、自己の意識が外的にその自身の生を道具のように利用するためということもできそうである。中根、2020、参照。

⁷ この点については有名なバラの匂いの比喩がそれをより強化するだろう。私がバラの匂いを嗅いだ時、「私は匂いそのものの内に、これらの思い出を嗅ぐ」（DI 107）という。連合主義は最初に非人称的、客観的な刺激というものの存在を予め仮定するが、意識の直接与件に基づくベルクソンは、匂いそのものが個性的な記憶イメージと不可分に与えられているというのである。

⁸ 『物質と記憶』において特徴的な努力に関する論述は、「情感 affection」に関するものである。「情感」は「知覚」に混ざりこむ「身体の部分的な努力」（MM 207）と規定され、この混入は不可的でどのような意識にも付随する。また「知的な努力」において主題化される記憶イメージの知的な操作、とりわけ記憶イメージの現勢化を前提する想起において、ベルクソンは、それが必ず記憶イメージの運動のおみならず、身体を前提とした信号を受け取ることが示されている。「平面的」ではなく「垂直的」（ES 940）に意識の平面を移動する意識が、様々な契機が相互浸透した「動的図式 *chéma motoure*」から具体的な諸イメージに分岐する際に、イメージが持っている運動感覚と結びつかなければならないのである。確かに「知的努力」においても、観念が行動になるように、一見すると「動的図式」からイメージへという一方向的な進行が見られるが、そこには身体的な努力感が内包されているのである。

⁹ ただし注意しなければならないのは、空間に併置されないということと質的な意味における延長が区別されるということである。空間は量的差異化の場として機能するが、ベルクソンはカントに習ってそれを先験的な理念として了解している（DI 69）。しかし質的差異を持つ広がり、身体を軸にする空間把握についてベルクソンは否定してはいないのである（DI 71）。

¹⁰ 『創造的進化』第一章における偶然性の論述において物質的抵抗の観念はより優位に論述されているように思われる。生命は環境に対応するために、様々な形態を偶然的に生み出すのであり、その点でこの外部からの抵抗の理論を「自由」において軽く見積もることは不相当だと思われる。中根、2020、参照。

¹¹ 同様にベルクソンは、「いかなる具体的な理由も欠如しているという事態は我々がより深く自由であればあるほどより一層顕著になる」（DI 113）と主張している。しかし、これはある意味で不思議な事態を引き起こす。我々が努力するとき、本来ならば行動の理由となる何かの目的を明

示的に意識して行為するはずである。しかし、自由についてはそうではない。理由となる観念が不明な状態でも努力し、なされる行動が自由な行動になるからである。我々が「意志」を自覚し、努力して行為する場合、それは無目的な「欲望」とは区別される。これは先に挙げた二つの講義でも指摘されていた点である。しかしベルクソンは目的のなさを重視する。これはどういうことか。可能性として立てられるのは、知性や言語表象を介した表層的な自我には捉えられない目的が私に対して働くということである。行動の理由となる目的は、深い自我から与えられるので、表層的な自我はそれが何かわからないままに従うという事態がここで進行していることになる。この点については平井、2011、2012を参照。

¹² 偶然について詳細に検討した九鬼の『偶然性の問題』の道具立てを通してベルクソンのそれを見た場合、「原偶然」あるいは「原始偶然」のような生の働きを意識的生が「離接的偶然」としてとらえ得ようとしているとしてみる事が出来るだろう。九鬼は『時間論』においてベルクソンの意識の直接与件に依拠する時間理論を批判し空間の必要性を主張しているが、偶然に対する理解もあくまで意識与件に基づきながら論述するベルクソンとその批判的な立場の九鬼による偶然のとらえ方がこの道具立ての違いをより明示化すると思われる。

Sur la contingence intérieure et le sentiment d'effort chez Bergson

NAKANE, Hiroyuki

Résumé:

Selon Bergson, le moi profond se groffre à mesure que les états conscients antécédents pénètrent l'état suivant, et se manifeste comme l'acte libre. Dans l'acte libre, les antécédants se rattachent inséparablement au suivant. Mais, cela ne se révèle pas au déterminisme, puisque les antécédants ne travaillent jamais comme la raison de la causalité. C'est contingente que le rapport de les antécédants au suivant est.

Bergson dit que l'idée de l'action préforme l'action, et qu'il y a les intermédiaires lesquelles nous recevons comme le sentiment d'effort. L'exigence du sentiment d'effort nous désigne la rapport à les réalités extérieures. Le progrès de l'idée à l'action est résisté à les réalités extérieures et ne se développe pas unilatéralement. Et, dans le moi qui se fait l'ensemble des états conscients, il est impossible que seul idée réalise à l'action. Comme certaine progrès de l'idée se pénètre de l'autre progrès, l'autre sais le remplacer à la mesure que le première se développe. C'est parce que, la contingence intérieure derive de la double cause de la rapport à les réalités extérieures et de la réalisation que les progrès développent parallèlement.

mot-clefs:

liberté, préformation, effort, contingence